

な特徴ではあるけれども、他面には、牧野森林の交錯して描き出す美しさも捨てがたいものである。五万八千町の原野の半分は造林でき、それによって農家の畜産収入を減らさずに、林業所得をプラスすることは可能である。もちろん野焼の習慣はやめなければならぬ。

球磨地方を主とする地味の良い広葉樹林が、スギ、ヒノキなど針葉樹人工林に変わっていくべきことは当然である。しかし一方斜陽化の一途をたどる製炭業ではあるが、球磨は特産地としての伝統的な

やぶれた山に植え続けた

## 広津又蔵さんの

### 六十年

(上益城郡矢部町)

日なたに出ると、すぐぶっ倒れるほどの、ひ弱な少年がいた。あちこちの医者通いの末最後の医者の処方箋は「薬は飲むな。一日山へ行って遊べ」だった。そしてこれは見事に成功した。健康で、たくましくなった青年は、山こそ命の恩人と信じて疑わなかった。

昭和三十一年、優れた篤林家として黄紺褒賞をうけ、一昨年、ヨーロッパ、アメリカ各地の林業を視察し、今なお、元気で山へ通う広津又蔵さん(82)の山とのつながりは、こんなスタートだった。

日露戦争から帰った広津さんは、当



広津又蔵さん

時、御船に講演に来た本田静六林学博士の影響を強くうけ、人の見捨てた破れ山を片っ端から植林してまわった。所得の殆どを山につき込むという方針を実行することは容易ではなかったが、山を仕立てることだけが生き甲斐かのようにひたすら植林に植えた。

経済基盤の浅い山間農業こそ、目前の利益をのみ追うより、安定した林業の裏付けがある。何よりやる気起こさせること、と強い口調で語る広津翁である。(W)

には疑問があり、実際はもっと高かったと見られる。人工林率も六〇%ぐらいには高められてよい。

しかしスギの適地は次第に減ってきているし、多少無理をしてもスギ、というのは考えものである。将来スギの大量供給から、工業原料材として使われるという点からは、スギは必ずしも得でないという学者もある。

その点用途の面からヒノキの方が確かである。また最近識者が憂慮するように、スギにも虫害はあなどりがたい。その他諸害に対する抵抗性を高める意味からも、広葉樹林を適当に残すということも考えられてよく、同時に暖帯広葉樹林施業法にも改善があつて然るべきである。芦北林業にも木場作廃止やマツクイムシ侵入など条件の変化に対し、技術革新による対応が検討されねばならないだろう。天然更新の導入、ヒノキの割合の増加などが考えられるように思う。

早生樹モリシマについては試験段階を過ぎ育林技術もほぼ分明了ようである。瘠悪林地を持つ農家経営の一部に入り入れられて、二町歩から年々一〇万円の収入はあけ得られる。適地と施肥法を誤まらぬことが肝腎であろう。

さて今まで熊本林業の現状とその方向を考察してきた。ビジョンはできるだけ明るく大きい方がよいに違いない。しかし林業のような、気永で地味な産業につ

いては、一足跳びに大きな夢を描いていても、何となく空々しい感じがする。既存の特色ある地方林業は、経営基盤の整備や資本装備の高度化などによって、これをあくまで健全に伸ばすと共に、水準以下の後進地を、林道開設資本導入などで林業生産に積極的に参加させ、林業従事者の地位も高めようというに尽きる。その場合森林組合をもっと充実させ、活動させねばならぬ。

ただここで問題になるのはどうしても林業労働力の確保であろう。グリーンレーパーのみならず、山村では挙家離村も現象している昨今である。私は、熊本県の林業は、現在程度の山村労働人口をどうしても必要とするし、それを所得向上によって山村に支えることも不可能ではないと考えるものである。具体的には森林組合の活動で、労務班結成などうまく行っている例も少なくない。

しかし林業従事者の山村での生活はたしかに恵まれること薄いものである。県当局も、新産都市などという、明るい優等生の息子にばかり気をとられて、地味でバットしない息子のような、山村民や林家の福祉ということを、忘れないようであつて欲しいものである。それによって、熊本県の森林は各種機能を十分發揮し、林業は県経済の支柱の一ともなりおおせることであらう。

(九州大学教授)

(16頁から)  
まず一番目は原竹でございませぬ。園地化される段階での間引きしたもの、あるいは竹細工などで出る端材の丸もの、それと竹細工の廃材との二つを考へております。で、この廃材の方は、技術的な面でなかなかむづかしい為、特殊なチップパー機を考へなければならぬかと思ひます。

——竹の流通過程についてですね、昔から非常に特殊なやり方で、仲買人が前金をおいてゆき悪くいえば買いたたいて行くというようなことを伺ったんですが、そういう古い流通過程が残っているんでしょか。

菅野 そうですね。少しも変わっておりません。その点で、組織づくりが本当に必要な時期に来ているということを、生産者に知ってもらわねばならないと思うのです。竹材界では、強力な団体ができていないので、市場価格なども把握できにくい状態です。ひとつ県の指導で組織づくりをやりたいです。

魚住 産業館をもっと活用して、市況などを流してもらうようにすればうまく行くのではないでしょか。県内業者の中で、ドンドン値下げの格好になるのは全く不合理ですよ。県内の価格、規格などをまとめていくのが必要でしょう。

## 森林組合の育成強化へ

藤本 外材のことですが、外材のバタ

1材の歩止りと、杉のバターの生かし方ですが、最終工程の函になった場合、外材の方が金銭的の歩止りが良いのです。それで我々が考へるのですが、県の特産の杉をこなす方法、杉のバターをこなす二次加工、三次加工が是非必要だと思ひます。それが解決しましたら、現在の外材の流入は十分防げるのではないでしうか。

犬童 さきほど話がありました原本市ですね、既存の市場は、従来、ほとんど製品を主体として行なわれてきたのですが、最近いわゆる原木の共販市という形が大部できております。これに対し県有材の素材出荷ですが、従来既存の市売りに対しては、市売連盟ですか、協議会ですか、そういったものを通して出してもらっていた。それから県森連ですね。一年、二千七百mぐらいたそうですから量的には大したことはないのですが、ただ、県有材を素材として市場に出すというねらいは、県内零細業者にも、配分にあずかりうるような点、林業技術の向上などいろいろあると思ひます。

そうすると、新設の原木市などにも、既存の市場に出荷すると同じように、出荷することが必要なのではないでしうかね。この点について陳情書も提出したのですが、県有林課の回答は、直接原木市に出荷することは具合悪いと、一括、市場連盟に対して出す方針であるというようなことでした。要するに市場連盟に

加入しなければ配分にあずからないというわけですね。ところが、既存の市場は製品を主とするものであり、私たちの市は原木だけの市場であるという違つた事情にあるので、市場連盟に加入する必要があるかどうかと思ひます。加入しなければ、県有材の出荷の対象とならない。一括して出す場合、手間はかかるから、少しづつ、そこをめんどうがらずに、何とか、市場の実態、県有材の分布状態などを勘案されて、県内配分の方法を研究していただけないものだろうか。それが、県の素材生産の目的にも合致するのではないかと思ひます。

魚住 県有材を委託してもらつたということでおおよその話をまとめかけていた時に、林務部内から、「森林組合の手には負えるだろうか」という声が出て、大変意外に思つたことがあつた。従来弱かつた森林組合の感で、ついそんな発言が出たのだと思ひますが、森林組合の育成といながら反対の方向に持つて行くような発言はどんなもんかと思つたわけですね。

林業の景気が下向きになればなる程、森林組合への依存度が高くなつていく時この際、徹底した組合育成を考へていただきたいと思ひます。

——林業の現在、将来の問題点などそれに、林務行政へのご要望などお聞きいただきましたが、私共も今後皆さまのお意見を聞きながら、県の行政に反

映させるよう努力してみたいと考へます。熊本県林業がどういう方向にあるかということ、ある程度描き出せたと思ひます。大変有意義な座談会になりました。どうもありがとうございました。

(文責・広報課)

(座談会あとばなし)

座談会が終つてホッとしたところでお茶のみ雑談に移つたが、ここにその中から拾つた捨てがたい妙句、名句の一、二を披露してみよう。

★木は植えて見るもんですね、小さい木はそれなりに楽しみがわくものですよ、もつとも私自身について云えば、親が植えたスギを伐つて生活している。掠奪林業と云えば、まさにそのとおり。スギを食つているので、オレはスギタマバエだ……芦北の〇〇さんはマツクヒムンですね。

★山を植えるのは楽しみをもつてやらなければならぬと云うが、ながめて楽しむだけが能ではないと思ひます。森林所有者は所有権を行使する権利がある反面、山林を立派に維持管理する義務がある訳ですから、そう云うことからいふならば、国家社会が要請する木材を供給するつとめがある、その辺の自覚が森林所有者に大切なことではないでしうか。